

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
233	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Violence and psychiatric morbidity in the national household population on Britain: public health implication. 英国全国世帯調査における、暴力と精神疾患罹患との関連 / その公衆衛生学的重要性	
執筆者	
Coid J, Yang M, Roberts A, Ullrich S, Morgan P, Bebbington P, Brugha T, Jenkins R, Farrell M, Lewis G, Singleton N.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Br J Psychiatry.2006 Jul;189:12-9.	
キーワード	
暴力, 精神疾患罹患, 危険飲酒, 人口寄与危険度	
要 旨	
<p>目的： 暴力を含む反社会的行動を多くおこす集団の中における、精神疾患罹患者が占める割合は少ないのかどうかについて、明確な解答はこれまでにない。英国全国世帯調査において、精神疾患罹患及びその重症度と、暴力や被害者の詳細との関係について調査した。</p> <p>方法： 国立統計部によりコンピューター上でインタビューが行われ、そこから各世帯より一人を対象者として抽出し、8397人が対象者となった断面調査である。質問項目に対する回答より、対象者は精神状態について、問題なし、神経症、薬物もしくはアルコール依存、精神病の可能性に分類された。暴力行為については過去5年以内に、どこでどんな人が犠牲になった暴力であったか、暴力の転帰はどうだったかについて分類が行われた。</p> <p>結果： 暴力の被害者が傷害を負ったり、過去5年間に5件以上の暴力沙汰をおこすことに対する、危険な飲酒習慣のオッズ比は約2、同様に、被害者の種類として3つ以上にわたることに対するオッズ比は約4、加害者自身が傷害を負うことに対するオッズ比は約3、酔っている時に暴力をおこすことに対するオッズ比は約6でありいずれも有意に高かった。同じく、近親者や友人、見知らぬ人が被害者になるオッズ比は各々約2でこれも有意であった。暴力をおこす場所としては家や路上、バーなどで有意にオッズ比が高かった。危険な飲酒習慣(アルコール使用障害同定検査(AUDIT)で8点以上)を持つ場合、傷害を伴う暴力をおこすかどうかについての寄与危険度は51%であった。同じく反社会的人格障害を有する場合、傷害を伴う暴力をおこすかどうかについての寄与危険度は24%であった。しかし、精神病を有する場合の、同様の事柄に対する寄与危険度はわずか1.2%であった。</p> <p>結論： 危険な飲酒習慣が関与している暴力についての対策としては、集団介入が適している。反社会的な人格障害では例外的にリスクは高いものの、彼らの半数は暴力的ではなかった、このことは、高いリスクを持つ個人を抑え込む為に標的を絞って介入をすることの限界があることを示唆するものである。</p>	